

エドモントン便り(1)

『青い空』

アルバータ大学教授 藤永 茂

「空が青いですねえ」

福岡からエドモントンにやって来て間もないSさんにそう言われて、私は初夏のエドモントンの空の青さを今更のように仰いだのだったが、それからしばらくしてイタリヤの大学都市ピサからエドモントンに着いたM教授の奥さんにこの土地の第一印象を求めたところ、「空が美しい」という答えがすぐに返ってきたのには、

すっかり考えこまされた。

エドモントンは、カナダのアルバータ州の首都で、北緯五十四度(樺太の北端あたり)に位置する人口約五十万の都市である。市の東部には石油の精製工場が並び立ち、自動車の数も北米の五十万人都市としては最高に近いと思われるが、それでもエドモントンの空がその青さを

失わないのは、このカナダという国の大きさのおかげである。アルバータ州だけでも、面積で日本の二倍に近く、人口は約五十分の一である。隣人愛を説く宗教に帰依しているはずの人たちの国ならば、こうまで欲張って広い土地を占めなくとも……と私は思うのだが、まあ今は話を

「青い空」にもとすことにしよう。

カナダ西部にあるアルバータ、サスカ

チュワン、マニトバの三州はプレーリー・プロビンス(Prairie Provinces)と呼ばれる。プレーリーはもともと大草原を意味する。このカナダ西部の大草原は、太古の昔からバッファロー(アメリカ野牛)と原住民(いわゆるインディアン)たちのものであった。大草原の上には、ただひたすらに深く広い大空だけがあつたに違いない。

現在では、この三州の大草原は世界で最も豊かなパンかごの一つに変わっている。見渡す限りの黄金の麦の穂波や黄色の菜種(こちらではレイブ・シード・rape-seeds)とよばれる)の花、白いそばの花などで満たされ、その中を、文字通り地平線に消え入るまでまっすぐな直線線をもったハイウェイがよぎっている。どちらを向いても地平線——つまり三百六十度の地平線を見ながら車をドライブする快感、あるいは捲意(?)を味わうことも可能である。「天」と「地」の実感が圧倒的にそこにはある。このプレーリーの空の夕焼けがまた素晴らしい。西の空だけではない。全天が焼けるのである。全天が燃えるのである。あかね色に燃えた雲たちは、立原道造が詩ったように「ふとあおざめて死」んだりはしない。鋭く澄み切った青さの空を、地平線の近くにのぞかせながら荘重な原始の蒼黒色にゆっくりと色を変えて行く。大空一杯の沈黙の大シンフォニーの幕は、悠容としておろされるのである。

この北国の空は、ときたまオーロラ(北極光)の大カーテンがゆれかがやく舞台にもなる。真夜中の空高く美しいオーロ

ラを見つけると、すぐに親しい友人たちに電話で知らせることが、こちらの日本人の間で行われたりもする。ぐつすりとなむり込んだ所を電話のベルでおこされて、受話器をとりあげるねほけたふくれっ面が、オーロラと聞いてたちまちうれしい笑顔に変わる。

エドモントンの空のすばらしさをあれこれならべたてる恰好になってしまったが、実は、この空は、何も飛びきり青くすばらしいわけではない。しかし、強調したいのは、エドモントンの空の青さは、私の幼い日々の記憶にあるふるさとの空の青さと同じものだということなのである。流れゆくちぎれ雲のたたままいも、夜空に仰ぐ星の数も、満月の兎の餅つきのあきらかさも、なつかしい昔と変わっていないということなのである。

万葉の昔から、空のたたままいは自然をめぐる日本人の情緒生活にとつて大切なものであった。我々の空がどんなに豊かなものであったかは、私の浅い古典の素養の底をあさってみても、容易にたしかめることができる。

わたつみの豊旗雲に入日さし今夜の月
夜きよらけくこそ(万葉集)

大空は恋しき人の形見かは物思ふこと
にながめらるらむ(古今和歌集)

ながむれば心もつきて星あいの空にみ
ちぬるわがおもいかな(新古今和歌集)

あるいは若山牧水の

しら鳥はかなしからずや空のおお海の
あおにもそまずたじよう

これらは誰の心にも親しい歌であろうし、また、カール・ブッセの「山のあなたの空とおく、さいわい住むとひとの……」も上田敏の名訳によって、我々の青春の空への憧憬の切なさそのものであつたはずである。いや、名歌、名句を借りる必要さえもない。ひとそれぞれふるさととの山河、その上にひろがるふるさとの空がどれだけ大切なものであるかを知らぬのに、他人の口を借りる必要はないのである。

しかし、と私は考えこむ。日々の生活の忙しさに追われ、人為的につくりあげた「生活の豊かさ」に目を奪われて、我々は頭上の空がどうなっているか、どうなりつつあるか、あるいはどうなつてしまったか、気がつかぬままに生きていっているのではあるまいか。まやかしの生活の豊かさを手に入れるために、我々は空の青さを手放し、それを忘れてしまおうとしているのではあるまいか。もしそうだとすれば、損失はあまりにも大きく悲しい。

青い空、星いっぱいのは空は、我々人間たちすべてにとつての大切な「神話」であるのかもしれない。その空が失われるとき、我々の内部でも人間のすこやかな存在に欠くことのできないあるものが崩れ去ってしまうのかもしれない。私はエドモントンの空の青さを仰ぎみながら、しきりにそう思うのである。